

古典和歌教材化の可能性

1 はじめに

古典和歌は、第三学年の第四單元冒頭に「君待つと―万葉・古今・新古今―」という教材名で位置づけられており、万葉から九首、古今・新古今からそれぞれ四首ずつ教材として採られています。

ここでの学習は、和歌学習の系統でいえば、第二学年での近代短歌の学習、すなわち「短歌を味わう」や、資料「短歌十二首」の学習を受ける形になりますし、古典学習の系統でいえば、第一学年の「いろは歌」や「竹取物語」から始まった中学校古典学習の総仕上げという位置づけになります。さらに、ほとんどの生徒が

山梨学院短期大学教授
松野洋人

高校に進学するという状況を考えれば、高校一年の「国語総合」などにおける古典学習への橋渡しという点についても意識しておく必要があるだろうと思います。

2 教材化の可能性

(1) 教科書所載和歌を掲載順に

教科書のもつ性格上、教科書所載の和歌は、「よみ人しらず」の例外はありますが、その歌集における代表歌人の代表歌を選定することにならざるをえません。また、中学三年の発達に合った歌、各歌集の歌風や技巧を反映している歌という制約も選歌の考慮条件になって

います。

そのようなフィルターを通して選定された十七首の和歌ですから、古典和歌学習の導入教材として極めて妥当なものなのです。したがって、教材の和歌について、一首ずつ順に「歌意」を確認させ、作者の「感動・心情」を想像させるとともに、読み手である生徒自身の「感想」をまとめさせるといった流れが、基本的な学習スタイルといってよいでしょう。

(2) 「詞書」を補足して

教材の和歌群は前項と同じ教科書所載和歌です。

古典和歌の指導における問題点の一つは、和歌の言葉をいくら丁寧に見解い

ても、生徒たちの心をなかなか揺さぶることができないということです。各歌が作られた背景には、それぞれさまざまなドラマがあるはずなのですが、教科書の情報だけではそれが見えてこないのです。

「題知らず」などの歌もありますが、ほとんどの歌には「詞書」というものが付いており、その歌がどのような状況の中で作られたのかをうかがい知ることができます。この「詞書」を手がかりに歌の作られた背景や状況を確認させることで、それぞれの歌の世界に深く入り込ませることができると思います。

(3) 新たな教材群を構成して

これは、まったく新しい教材ユニットを創案するという形です。この場合、まず問題となるのは教科書所載教材をどうするかということです。授業時数に余裕があれば、発展学習として授業時間内に扱い、余裕がなければ課外学習として生徒個々に取り組ませることになるでしょう。いずれにしても、「歌意」作者の思い」「自己の感想」などの欄を設けた学習シートを用意し、生徒が自学できるように条件を整えておく必要があります。

次に、教材ユニット例を二つ紹介しましょう。

(A) ある主題で教材群を構成する

「愛」「別れ・死」「季節感」「無常観」など切り口はさまざま考えられますが、例えば、万葉を「愛」で構成した場合、次のようなユニットも考えられます。

- ① プロローグ
「籠もよ み籠持ち」 雄略天皇1
- ② 片思い
「夏の野の繁みに咲ける」 大伴坂上郎女150
- ③ 待つ
「君待つと吾が恋ひをれば」 額田王488
「あしひきの山のしづくに」 大津皇子107
- ④ 姉と弟
「吾が背子を大和へ遣ると」 大伴皇女106
「二人行けど行き過ぎ難き」 大伴皇女106
「ももつたふ磐余の池に」 大津皇子416
- ⑤ 初々しく
「多摩川にさらす手作り」 東歌337
- ⑥ 夫婦、親子
「憶良らは今は罷らむ」 山上憶良337
「瓜食めば子ども思ほゆ」 山上憶良802
「銀も金も玉も」 山上憶良803

(B) あるテキストを丸ごと教材に

中学三年生に、質的にも量的にも合ったテキストは、それほど多くありませんが、万葉であれば、『万葉のうた』(文・大原富枝、画・岩崎ちひろ 童心社)がよいと思います。十二のユニットで構成されており、大原氏の解説文が秀逸です。指導時数にゆとりがなければ、いくつかのユニットに絞って扱うことも可能です。万葉では、『いにしえからのラブレター』(著・ryo、ヴィレッジブックス)も使えるかと思えます。現代語訳も独立したアンソロジーのようで、なかなか楽しい構成になっています。

これらを実践する際に留意すべきは、先に指摘した指導時数の問題以外に、テキストの準備の問題があります。公費で一学級分の冊数を購入し、国語科の備品として整備しておく必要があるのです。